

島圭次氏（元NHK会長）に聞く 忍耐強い人でした

—聞き手・編集委員



大平志げ子夫人の誕生日を祝うパーティーで親しい友人たちと花束を贈呈した島圭次氏（中央）、右は福川伸次氏（ホテルオークラで、1984年11月20日）

大平夫妻との出会い

——島さんは大平総理にもっとも近い政治記者であっただけでなく、大平夫妻のアドバイザーでもあったわけですが、大平さんとのそもそもの出会いは、どうだったのですか。

島 多分、昭和三〇年頃だったと思うが、NHKの地方局勤務を終え東京に来た私は、総理官邸詰めの駆け出し記者として池田派を担当することになったのです。当時の池田勇人さんの記者嫌いは有名で、せつせと夜回りしてもほとんど口は利いてもらえず、「お前のような若造は、大平正芳という俺の自分がいるから、そこへ行け」と言われて、本郷の大平さん宅を訪ねたのが、大平夫妻との初めの出会いです。当時、代議士になつたばかりの彼を訪ねる記者など、ほとんどいなかった。私が訪ねて行った時も、「お前さん、場所を間違えたんじゃないか。俺のところに来て、しょうがないじゃないか」と言いながら、にやにや笑っていたのを憶えています。

——それから大平邸通いが始まった……。

島 それから私は頻繁に通うようになる。当時、私はボトル一本ぐらいの酒を平気で毎日、飲んでましたが、大平さんは一滴も酒を飲まない人だった。私は志げ子夫人に「ウイスキーを出せ」と、あつかましくも無理を言い、ひとり酒をがぶ飲みしていたものです。一方的に酔つ払つて、わあわあしゃべる私に、大平さんは嫌な顔ひとつせず、自分は水を飲みながら、何時間でも私が帰るまで応対してくれていました。

そんな私に業を煮やしたのは、むしろ志げ子夫人だったと思う。私が玄関に入るやいなや、箸をあ

るだけ廊下に並べかけ、手拭いをかけて回るのに忙しかった、と後にご本人から聞いたものです。

——その五年後に池田内閣ができて、大平さんが内閣官房長官になるわけですね。

島 昭和三五年（一九六〇年）日米安保条約改定をめぐるの大騒動の中で岸信介内閣が倒れ、池田さんと石井光次郎、藤山愛一郎さんの三人が立候補して、総裁選挙が行われ、決選投票で池田さんが当選して、新内閣を組閣することとなった。事実上、官房長官に内定していた大平さんは、箱根の仙石原で静養中の池田さんを訪ね、新内閣はまず何をすべきか、それをなすためにどのような組閣をすべきなのか、という話し合いをしていました。その時、私も仙石原に同行し、帰りは大平さんの車に同乗していたのです。当時、箱根 東京間は今は違い道路が悪く、四、五時間以上かかったと思います。車の中で大平さんは、念願の池田内閣誕生という喜びで、珍しく鼻唄まじりに「北帰行」や「夜霧の第二国道」などを口ずさんで上機嫌でした。

——何か相談ことがあったのですか。

島 そうなんです。鼻唄をうたっていた大平さんが途中からだんだん静かになっていき、長い間、目を閉じ沈黙を続けた後、私にこうつぶやいたのです。「島君、池田さんは国論を二分する安保騒動という大変な事態を収拾して、これから日本の政治を軌道に乗せることが本当にできるだろうか。池田さんの暴言癖は、『貧乏人は麦を食え』だけではない。いつも言いたいことを言い、そのたびに大臣の席を棒に振ったことが何度もある人だ。池田さんを助けてこの難局を本当に切り抜けることが、俺にできるだろうか」。大平さんはそのあと続けて「島君、いろいろ考えてみると、池田さんを補佐するために俺はどういう役割を果たしたらいいんだろうか。考えてみれば、池田さんにはあつて俺に

実
はないものはいくらでもある。だが、池田さんには足らず俺にあるのは何だろう。……少なくとも俺
就
には、相手の立場になってできるだけ考える寛容さと忍耐強さだけは自信がある。それが、これから
華
の池田さんには必要なことではないか」と言ったのです。

去
——有名な池田内閣のキャッチフレーズ「寛容と忍耐」ですね。

「寛容と忍耐」のキャッチフレーズで

島 その直後に池田内閣のキャッチフレーズが発表された時、私は「大平さんもなかなかやるな」と実感しました。「寛容と忍耐」……これはまさに人間・大平正芳を象徴する言葉です。安保騒動さめやらぬ中、池田内閣が順調にスタートできたのも、ともすれば暴走しがちな池田さんに対して、大平さんが文字通り「寛容と忍耐」をもって池田さんを補佐したからこそと思うのです。彼の持ち前の寛容さと耐力強さは生来の資質はもちろんだが、若き日の苦労によるところも多いと思います。四国・香川の百姓のせがれに生まれ、さほど裕福でない家庭に育った。高松高等商業学校（現在の香川大学経済学部）、東京商科大学（現在の一橋大学）に、地元の有力者の援助で進学させてもらえたと
いう苦勞人ですよ。これは、当時の政治家の多くが裕福な家庭に生まれ、旧制高等学校から大学というコースに進んだのとは、まったく対照的ですな。

——非常に忍耐強い人でしたね。

島 忍耐強さといえば、大平さんは家族に対して一遍たりとも怒鳴ったことがないということですよ。

事実、志げ子夫人が亡くなる前、毎日のように夫人に呼ばれて虎の門病院に通い詰めた折にも、よくその話を聞いたものです。「いろいろなことがあったけれど、主人に一番、感謝していることは、私たちが家族を一遍も怒鳴ったり、怒ったりしたことがないこと。私は、それをとても感謝しているの」と言っていました。夫人は「台所に立ったこともなければ、ご飯を炊いたことも、一遍もないのよ」と冗談まじりに言うくらい、恵まれた環境に育ったお嬢様気質の人でした。そんなじゃじゃ馬で明るい彼女が、しんみりとそういう話をしてくれたのを、昨日のこのように思い出しますね。

—— 政治生活でも忍耐強い面が多々、あったと思いますが……。

島 池田総理が病院で東京オリンピックを最後に引退することになった頃のことです。次の総裁候補をめぐって佐藤栄作、藤山愛一郎、河野一郎さんなどが総裁選を争うこととなった。大平さんは当時、池田さんの後継者には同じ吉田学校の卒業生である佐藤さんが一番、適任と考えていました。ところが、前の総裁選で佐藤さんと池田さんが激しく争った際の怨念が池田派内にあったのでしよう。その余波を受けて、池田派の中でも前尾繁三郎さんを中心に、この際、佐藤さんではなく藤山＝河野連合に政権を渡したほうがよいのではないか、という動きが少なからずあった。事実、池田さんもちらがよいか迷った時もあったが、終始、佐藤さんを支持していたのが大平さんだったのです。

—— それで佐藤内閣が誕生する……。

島 結果的には佐藤さんが指名され総裁に就任したのだが、皮肉なことに、どこでどう取り違えられたのか、佐藤さんは、池田派内の反佐藤派の中心人物が大平さんであると誤信してしまった。佐藤内閣は七年もの長期政権を続けたが、その間、大平さんは絶えず佐藤さんに冷たい扱いを受けたので

実す。私は事実を知っていただけに、「佐藤内閣を作ったのは、事実上あなたや田中角榮さんではないですか。それを佐藤さんに逆に受け取られたままで、あなたの気持ちは納まるのですか？」と、問い詰めたこともあります。すると大平さんは、「そんなことは、どうでもいいじゃないか。佐藤さんには佐藤さんなりの考えがあって、そうしているのだ。時には堪え忍ぶことも政治家には必要なんだ」と、きっぱり言っていました。

——そして佐藤内閣が退いて、「三角大福」時代に入りますね。

「三角大福」時代の 大平さん

島　　そう。佐藤内閣が終わりに近づいた頃、田中、大平、福田赳夫、三木武夫さんの四人が、総裁選挙を争うことになる。この「三角大福」の争いは、結局、大平さんの寛容さが田中勝利を導いたと言えます。というのも、田中さんは佐藤派、大平さんは池田派だったが、派閥を越えて二人は深い親友関係にあったからです。二人は、池田さんと大平さんと同様、きわめて対照的な政治家だったと思う。大平さんの「寛容と忍耐」に対し、田中さんは「決断と実行」で、両者は相補うような関係を持つていました。池田内閣時代に田中さんが大蔵大臣に抜擢されたのははじめ、田中さんを重用するよう池田さんに進言したのは、ほかならぬ大平さんだった。大平さんは、年下の田中さんを陰に陽に応援してきた。その二人がともに総裁を争うことになったのです。

——大平さんが田中さんを先行させた、ということですか。

島 その頃のある日、私は田中さんに会って、「あなたは党内最大派閥の領袖で、今度の総裁の最有力候補であることは間違いない。だが、あなたはまだまだ若い。急ぐことはない。先に大平さんを総理大臣にさせて、それを田中さんが継ぐという形のほうがよいのではないですか」と、進言したことがあります。だが、彼は例の調子で、「大平君は確かに俺より優れている面がある。だが、彼は幹事長と大蔵大臣のポストをまだ経験していない。総理の職を担うには、この二つのポストをやっておかないと、やりづらいことも多かるう。だからこの際、すでに二つのポストを経験している俺が、まず総理になる。その代わり俺がやった後は、必ず大平君に総理をしてもらおう。そのほうが大平君のためにもなるんだ」と言つて、譲らなかつた。

結局、大平さんが田中さんの言葉を聞き入れ、田中「大平連立内閣」ともいえる新内閣が誕生した。田中内閣時代、大平さんは進んで田中さんを助けて、日中国交回復交渉をはじめ外交面で活躍し、二人の共同戦線は続いていくのです。その後、様々な出来事があり、三木内閣、福田内閣と続いたが、この間、終始、田中さんは大平さんの厚意に報いるべく、大平内閣の実現に積極的に協力していたことは確かです。二人の関係が単なる政治家同士の利害関係ではなく、深い友情に結ばれていたということは、私が二人のところに入り込んでいただけに、よく知っています。

—その後、大福提携、大福対決となつて行くわけですが……。

島 昭和五年（一九七六年）三木内閣の後を受けて、福田さんと大平さんが総裁選を争うことになった。当時、私はNHKアメリカ総局長として日本を離れていたが、風の便りで福田さんと大平さんが、総裁選を避けるために、福田総裁、大平幹事長という態勢でスタートし、二年後には福田さん

実が必ず大平さんに総裁の座を明け渡すと文書で約束した、という話を聞いたのです。私はすぐさま大平さんに電話をして、「あなたは福田さんと約束したそうだが、そんなものが当てになりますか！岸総理と大野伴睦さんとの約束を思い出して下さい。大野さんは、岸さんに約束を反古にされたじゃないですか。総理総裁を目指すなら、今こそ断固戦うべきです」ということを強く進言しました。

それに対して大平さんは、「島君、だまされても、それが国のためになるならいいじゃないか」と言つて聞く耳を持たない。「あなたのそこがだめなんです」と私は執拗に食い下がったのだが、大平さんの決意は変わらなかった。結局、私の予想通り約束は忘れ去られ、昭和五三年（一九七八年）一月、福田さんは自民党史上最初の黨員・党友全員参加による総裁公選をやった。福田さん自ら優位と踏んでの行爲だったが、幸か不幸か大平さんが大差で勝利し、大平政権が誕生した。この時、田中さんは大平さんのために力を尽くし、約束を果たしたのです。

——寛容と忍耐の人、大平さんにとっては、この後の争いは耐えがたいものだったでしょうね。

「大福対決」の耐えがたい争い

島 争うということが、いかに大平さんにとって苛酷なことだったかは、その後の一般消費税をめぐる攻防で現われてくるのです。ある夜、一一時頃、私が大平さんの家に電話をすると、志げ子夫人が小声で「主人、もうずいぶん長い間、応接間で頭をかかえこんだまま、うずくまっているの。島さん、ちょっと寄って話してみてもよ」と言うのです。早速、私が訪ねてみると、大平さんは相変わらず

同じ格好のままである。声をかけると、ようやく頭をあげて「一般消費税をやるか否かで、まだふんぎりがつかず悩んでいる」と、つぶやくのです。いま思えばずいぶん無責任だったが、私はつい大声で、「なんですか！ 政治家がその政策を必要だと思ったら、内閣を投げ出してでも自分の命を捨てても、信念にしたがってやるべきじゃないですか」と怒鳴ってしまった。ところが大平さんはそれに何も答えずに、また下を向いたまま目を閉じて黙っている。その時、私は大平さんに「どうせ世の中、なるようにしかならない。あなたも奥さんを見習って、もつと楽天的にモノを考えたらどうですか」と言うと、志げ子夫人が「何よ、私が馬鹿だと言うために真夜中わざわざ来たの」と怒り出す一幕もありました。いま思えば、その姿こそ大平さんの最大限の葛藤の表現だったと思います。後で夫人に聞いたところだと、毎晩のように、大平さんは、何度も寝返りをつつていたという話です。

大平さんしてみれば、一般消費税を導入し税制改革を断行しなければ、もはや日本の財政は破綻するしかない。他方、導人を訴えれば選挙で負けることも分かりきっているだけに、その葛藤に悩んでいたのでしょう。結局、大平さんは、たとえ自民党が選挙で負けても、この際、一般消費税を導入すべきだという決意を固めて、選挙戦に臨むことになるのですが、この頃の大平さんは、すでに心身ともに消耗し尽くしていたと思います。

——そのあと、いわゆる「四十日抗争」に突入するわけですが……。

島　そうですね。「四十日抗争」が始まり、大平さんが総裁であるにもかかわらず、非主流派は福田さんを擁立、国会の首班指名に、自民党内から二人の候補が立つという異常事態が起こったのです。私は大平さんに、こう進言しました。「党内の総裁選挙ならいざ知らず、国会の首班指名に同じ党か

去 華 就 実

ら二人の候補が出るなど前代未聞、そんな勝手な党員は即刻除名すべきです。そもそも保守合同時代が長過ぎたのです。これを機にあなたが決断して、本格的な二大政党制に向けて日本の政治を変えていくべきではないですか」と。大平さんは、目を閉じたまま「一面では確かに君の言う通りだ。しかし、野党に政権担当能力のない現実の中では、何よりも政局の安定が不可欠だ。雨降って地固まるだよ、いまは地面を割るべき時ではない」と答えたのです。

——結局、大平内閣不信任案の可決 解散 大平総理の死という経過になってしまふ……。

島 大平 福田の衆議院本会議での決選投票で大平さんが首班に指名され、第二次大平内閣が成立した。ところが昭和五五年（一九八一年）五月、野党から提出された内閣不信任案に、自民党非主流派議員が便乗して欠席し、不信任案が成立してしまう。大平さんは即時、内閣解散を行い、憲政史上初の衆参同日選挙が行われることとなったのです。そんな度重なる苦難の中で、大平さんは横浜での選挙演説の途中で倒れて入院、再び虎の門病院を退院することもなく帰らぬ人となるのですね。

——大平総理の逝去は、本当に急でしたね。

大平総理の急逝と夫人の死去

島 前の日まで私は、大平さんがあんなに簡単に死んでしまふとは思いませんでした。あの日、夜一二時頃だったか、志げ子夫人から「お父ちゃんの心臓がおかしくなっている。いま人工呼吸をやっているけど死んでしまふかも知れない」と、悲痛な声で電話がかかってきたのです。それから約一時間後、私は大平さんの臨終の知らせを受けました。結局、一般消費税がきっかけとなって党内抗争をひき起こ

忍耐強い人でした

し、大平さんは壮絶な「戦死」を遂げたのですよ。大平さんの容態が急変した深夜、「お父ちゃんが死んでしまふ。早く来て」と電話で絶叫した志げ子夫人の声が、いまでも耳にこびりついていています。

——その志げ子夫人も、総理の後を追うように平成二年（一九九〇年）六月に亡くなられました。

島 亡くなられる前年の暮、志げ子夫人が体調を崩し虎の門病院で診断を受けたところ、手術しても回復不可能だと聞かされました。私は子供さん達と相談して、ご本人には病状を知らせないまま入院生活を続けてもらうことにしました。「私もお父ちゃんと同じように、生きてこの病院を出られないでしょう」と問いかける夫人に、いたたまれない気持ちで、亡くなる少し前、半日だけ救急車で瀬田の自宅に帰ってもらったのが、せめてもの慰めだったと思います。いまは、多磨霊園の大平さんと同じ墓に眠っておられるが、生前同様、思索にふける大平さんの傍らで、春風のような穏やかな笑みを浮かべた夫人が、無邪気に語りかけている光景が目には浮かぶような気がしてなりません。

（島氏が『大平正芳政治的遺産』及び『大平志げ子夫人を偲ぶ』に執筆されたものを再構成しました）

島 桂次（しま・けいじ）

一九二七年、栃木県生まれ。東北大文学部卒、

NHK政治部記者として自民党首脳、特に宏池会領袖（大平、鈴木両首相）とのパイプを築いた後、報道局長、副会長をへて、八九年に会長に就任した。NHK改革をめざして、ニューメディアへの対応など大胆な改革案を打ち出したが、九一年退任。島メディア研究所を設立し、インターネットを使った配信を始めた。大平正芳記念財団発足当初からの理事。九六年死去。著書に『シマゲジ風雲録』、『電子の火インターネットで世界はどう変わるか』など。